

# インドにおける中間層と観光の現状

## —観光行動に関する質問紙調査より—

中 谷 哲 弥

### 1. はじめに<sup>1</sup>

本稿はインドにおけるいわゆる中間層の観光行動に関して、首都のニューデリーで実施した質問紙調査の結果を検討することで、その動向について明らかにすることである。なぜ中間層の観光行動なのか、その問題意識はインドの国内観光に関する拙稿「新興国における中間層の拡大と観光—インドにおける国内観光の動向を中心として」[中谷: 2010]にもとづく。この論考においては以下のような問題設定を行っていた。

近年「ボリュウムゾーン」(急成長している新興国の中間所得層)という言葉によって、BRICs諸国(ブラジル、ロシア、中国、インド)をはじめとする新興国の中間層が新たな消費者として台頭し、有力な市場として注目されている。そしてBRICs諸国ではカラーテレビや冷蔵庫などを除くと、耐久消費財の普及率は総じて低く、特にインドは主たる耐久消費財の普及率が低いために、市場開拓の余地が大きいと考えられている。話をアジア諸国に限ってみても、世帯可処分所得5001ドル以上、35000ドル以下を中間層とした場合、日本を除くアジア地域で見ると、中間層は1990年には約1.4億人であったが、2008年には8.8億人となり、うちインドは2.1億人を占めるとされる[ibid.: 127-28]。

こうした認識が日本政府の『通商白書』や『ものづくり白書』でも紹介されてきた。インドについては、新興の中間層の様子が主要な新聞・雑誌、ビジ

## 論文

ネス書、テレビ番組などでも盛んに取り上げられてきた。人々が携帯を片手に闊歩し、自動車を乗り回し、ショッピング・モールへ乗り付けて買い物や食事を楽しむ様子は、今や定番の新興国イメージとなっている。しかし、これら一般（そしてかなりの程度においてアカデミックな分野でも）の関心は、あまりにも経済成長と現地で拡大する「消費」、特に耐久消費財の消費にばかり集中してきた。経済成長を背景とした耐久消費財の消費動向は現地の人々の生活レベルを測る重要な指標であり、それらが普及することで実際に人々の生活の様子が変容していることも事実であろう。とはいえ、耐久消費財に囲まれて暮らすようになったということのみから、果たして何が見えてくるのであろうか。経済成長に伴う所得向上と消費社会化が進むなかで、実際に彼らの社会生活がどのように変容してきたのか。この点については十分に捉えられてこなかった[ibid.: 127-28]。

そこで注目したいのが観光である。経済成長に伴う所得の向上、ホワイトカラーや組織部門での雇用の拡大などによって、インドでは仕事と余暇の領域が弁別されるいわゆる「余暇社会」が到来しつつあると考え、人々の生活やライフスタイルの変容を観光行動という視点から捉えるのである。余暇社会の主要な担い手はいうまでもなく中間層である。実際のところ、中間層の間では仕事と同時に余暇をどのように過ごすかが一大関心事となってきたと思われる[ibid.: 128-29]。

以上の問題意識にもとづき、前稿ではインド政府の観光統計や政策の推移などから、インドの観光内容が多様化していることや、国内観光が重要性を増していることを確認したうえで、政府系の研究機関によって実施された【国内観光調査 (Domestic Tourism Survey)】(2002-03年)の報告書を取り上げて、その内容を精査することで、国内観光の現状について検討した。

本稿は、筆者が独自に実施した観光行動に関する質問紙調査の結果をこの【国内観光調査】(以下、DTSと記す)の報告内容と比較検討することで、インドにおける観光行動の現状と最新の動向についてあらためて検討することを目的としている。質問紙調査はDTSとの比較検討を念頭に置いて、あらかじめ質問項目の設定内容についても考慮している。

以下、第2章ではDTSの報告内容について本稿の質問紙調査に関わる範囲でごく簡単に紹介した後、第3章では質問紙調査の結果について、DTSと比較しながら詳しく紹介する。第4章ではこれを受けて、インドの観光に関連して勤労者の勤務条件や休暇、手当の制度、近年のオンライン旅行会社の台頭など、観光者目線からの観光を取り巻く諸条件、及び筆者が参与観察した家族旅行の事例についても検討する。

## 2. インド「国内観光調査」について

DTSはインドの国立応用経済研究所（NCAER: National Council of Applied Economic Research）によって実施されたインド初の本格的な国内観光調査の報告書である。同研究所は経済動向や各種の統計調査の分野において、インドでもっとも権威のある機関と見てよいであろう。中間層の分析に関しても、この機関の調査報告が内外で参照されるのが常である。ただし、DTSは中間層だけではなく低所得層も含み、農村部と都市部の両方をも含んでいる。いわばインドの全所得階層と都鄙の全域を調査対象としているといえる。2002年の1年間を2つのラウンドに分けて、1,695カ村・1,024市町を対象に総計64,580世帯のサンプル調査が実施されている[DTS 4-6; 35-37]。

調査結果からは、まず所得階層でみると、インドにおいて2002年の1年間に観光に出かけた世帯のなかには、中所得層のみならず極低所得層や低所得層の世帯もかなり含まれていることが明らかにされている。特に農村部では極低・低所得層が観光者世帯の過半数を占めていた。しかしながら、観光の回数（件数）でみると「中所得層」世帯の割合が高く、旅行目的別でも、中所得層はすべてのカテゴリーにおいて他の階層を圧倒している。DTSは、この状況を踏まえ「インドにおける国内観光はきわめて中間層的な現象である」と述べている[中谷2010: 140-42; DTS: 19]<sup>2</sup>。

観光目的については、DTSでは「ビジネス・商業」、「レジャーやホリデー」、「宗教や巡礼」、「社会的目的」（「友人・親族訪問」「生誕・死去」「結婚」など）の4つに分類されている。全国の観光件数でみると、このうち「社会的目的」

## 論文

が農村部で61%、都市部で53%となっており、ともに最も大きな割合を占めている。インドにおいては「社会的目的」が観光において極めて重要となっている点が特徴的である[中谷2010: 141]。

以上が全般的な傾向であるが、もう少し細かくみると別の状況も指摘できる。例えば、農村と都市別に観光目的をみると、「ビジネス・商業」や「レジャーやホリデー」については、農村部ではそれぞれ観光件数全体の5%前後であるのに対して、都市部ではそれぞれ10%前後であり、都市部の方がビジネスやレジャーでの観光がより多く行われていることがうかがえる。また、「社会的目的」については、うえに述べた観光件数と同様に、観光者数でも、都市部では農村部よりも「社会的目的」の割合が9%ほど低くなっている[ibid.: 148-49]。DTSでは観光目的のカテゴリー（観光件数）ごとに、所得階層の割合も示している。これによると、高所得層はどの観光目的においてもわずかな割合しか占めていないのだが、「宗教や巡礼」と「社会的目的」ではせいぜい5%ほどしか占めていないのに対して、「ビジネス・商業」と「レジャーやホリデー」においては、10%ほどを占めている。逆に極低所得層と低所得層の占める割合は「宗教や巡礼」と「社会的目的」においてより大きい[DTS: 19]。また、観光目的と職業別カテゴリーをクロスさせてみると、「ビジネス・商業」目的では「ビジネス・商業」従事者、「レジャーやホリデー」では「給与所得者・非農業労働者」の占める割合が高く、「宗教や巡礼」と「社会的目的」においては、第一に「自作農・農業労働者」、次いで「給与所得者・非農業労働者」が大きな割合を占めている[DTS: 18]。

これらを総じてみると、インドでは全般的に「社会的目的」が重要であるが、観光目的が「宗教や巡礼」と「社会的目的」の場合には、所得の点では極低所得層と低所得層の、都鄙の別では農村部の人々のボリュームが大きく、反対に「ビジネス・商業」や「レジャーやホリデー」になるほど、高所得層、都市部、「ビジネス・商業」・「給与所得者・非農業労働者」のプレゼンスが大きくなってくと指摘できる。

次章で検討する質問紙調査結果には、DTS報告書におけるこうした動向が、ある意味より先鋭な形で表れている。すなわち、質問紙調査の対象世帯

はDTSの中間層区分よりもはるかに高所得で、職業としては「ビジネス」「給与所得者」「専門職」が9割を占め、観光目的については「レジャーやホリデー」が6割となっている。所得や職業と観光目的との連関がより明確な結果となっているのである。以下、こうした連関性を念頭におきつつ、次章では質問紙調査の結果から、実際の観光行動における訪問地の特徴、訪問目的、同行者、期間、交通手段、宿泊などについて検討していく。

### 3. 観光行動に関する質問紙調査

#### (1) 調査方法

質問紙調査の概要は以下の通りである。

実施日：2010年2月18日

調査地：デリー大学傘下のカレッジ及び大学院

- ・ヒンドゥー・カレッジ (Hindu College)
- ・デリー経済学院 (Delhi School of Economics)

対象：ヒンドゥー・カレッジの1-3年次まで学部生計66名及び

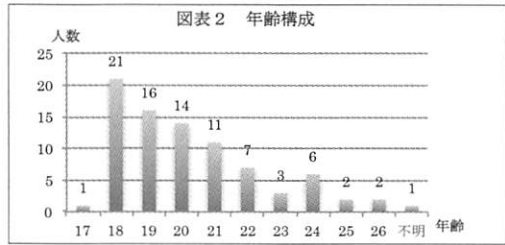
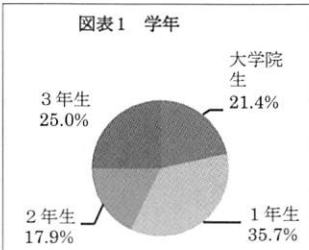
デリー経済学院の大学院生計18名。合計84名。

調査の実施にあたっては、デリー経済学院のオビジット・ダスグプト教授の紹介によってヒンドゥー・カレッジの3つの授業クラスにおいて質問紙を配布して実施した。デリー経済学院においては同教授の指導する大学院生の代表者に質問紙を渡し、当日の授業等で接触のある大学院生に回答を依頼し、回収してもらう形を取った。

質問項目は末尾の添付（調査票）の通りである。年齢、学年、出身地、宗教、保護者の職業、年間所得などの属性とともに、調査時点から遡って5年間の観光経験について記述してもらった。

両校は首都ニューデリー<sup>3</sup>に所在し、いずれも英語で授業を行う高等教育機関である。デリー経済学院（1949年設立）はインドを代表する研究大学院のひとつであり、またヒンドゥー・カレッジ（1899年設立）は人文、自然科学、商学分野ではインドでベスト10位内に入る名門カレッジのひとつである<sup>4</sup>。

## (2) 調査対象の属性

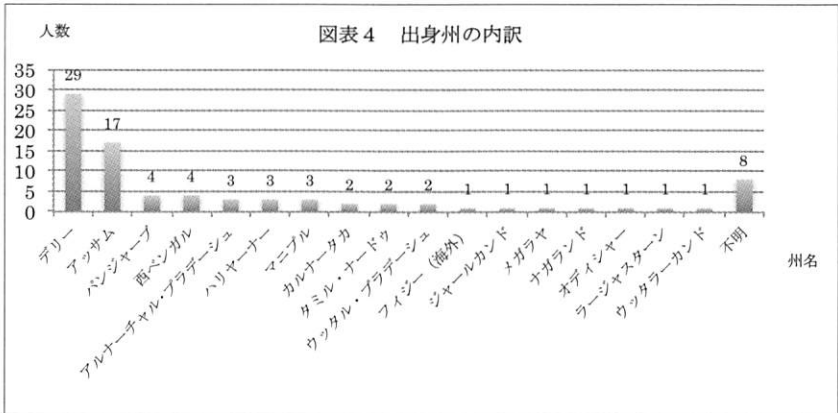


84名の回答者の属性は次の通りである。まず、学年については図表1「学年」の通り、84名のうち、学部1年生が30名(35.7%)、2年生が15名(17.9%)、3年生が21名(25.0%)、大学院生が18名(21.4%)である。性別は女性51名(60.7%)、男性33名(39.3%)である(以下、特に出典を記さない限り、図表のデータは筆者による上記調査にもとづくものとする)。年齢構成は図表2「年齢構成」が示すとおり、17才から26才に渡っている。

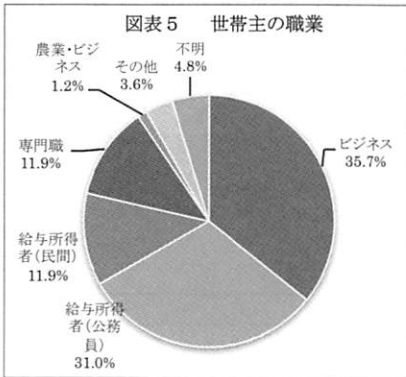


図表3「宗教構成」でみると、ヒンドゥー教徒が81.0%、シク教徒が7.1%、キリスト教徒が6.0%、仏教徒が4.8%、イスラーム教徒が1.2%となっている。ヒンドゥー教徒が多数を占めているものの、インドの宗教多様性を反映して、様々な宗教の学生がみられる。

次に出身州の内訳について見てみたい。インドは2014年3月現在で28の州と7つの連邦直轄地から構成されている<sup>5</sup>。図表4「出身州の内訳」が示すとおり、出身地については大学が所在するデリー出身の学生数が84名中29名と一番多いものの、それ以外の学生はインド全土から来ていることが分かる<sup>6</sup>。デリー周辺州であるハリヤーナー州やパンジャブ州はもとより、南インドや東インドの諸州からも来ている。さらには北東部の小規模諸州、なかでもアッサム州からの学生が17名とデリーに次いで多い。これら小規模州では地元有力な大学がないために、より優秀な学生ほどデリー等の大都市に所在する大学へと学びにやってくるという状況を反映していると思われる。



次に学生の保護者（世帯主）の職業について図表5「世帯主の職業」に示す。「ビジネス」（規模にかかわらず自営業）が35.7%と最も多く、次いで「給与所得者（公務員）」が31.0%、「給与所得者（民間）」が11.9%、「専門職」が



11.9%となっている。これらで全体の90.5%を占める結果となっており、調査対象となった学生の実家の保護者の9割が自ら事業を営む事業主やホワイトカラー層に属していることが分かる。質問紙では、「農業」「農業賃労働者」「賃労働者（非農業）」などの選択肢もあったが、「農業」と「ビジネス」の両方に従事している

という回答1件を除いては、これらに該当する回答はみられなかった<sup>7)</sup>。

最後に、保護者世帯の収入について、DTS（先述の『国内観光調査』報告書）による世帯収入別のカテゴリーを踏まえながら検討しておきたい。まず、DTSは、インド全土の世帯数を1億9,600万世帯と推計したうえで、調査年の2002年には、そのうち44%にあたる8,700万世帯が少なくとも1回は国内観光に出かけているとして、この8,700万世帯を「観光者世帯」と呼んでいる[DTS: 7]。そのうえで図表6「DTS報告書における観光者世帯の所得階層構

成比」の通り、所得階層を4つのカテゴリーに分けている。年間所得については、全国の平均が6万4,199ルピーである。ちなみに農村部平均が5万5,780ルピーに対して、都市部平均は8万9,191ルピーと、都市と農村では、かなり格差がある[DTS: 10-11]。

図表6 DTS報告書における観光者世帯の所得階層構成比 (%)

年間世帯所得別の階層	都市部	農村部	全国
極低所得 (2万2500ルピーまで)	7.1	23.2	19.2
低所得 (2万2501 - 4万5000ルピー)	19.9	32.1	29.1
中所得 (4万5001 - 16万ルピー)	63.0	41.5	46.7
高所得 (16万1ルピー以上)	10.0	3.2	4.9
合計	100.0	100.0	100.0

(出典：DTS, p.11 より筆者作成)

とはいえ、所得格差の一方で、農村部では所得の低い極低所得層や低所得層の世帯が観光者世帯の55.3%を占めていることから、これらの層も主要な観光の担い手である。都市部では中所得層 (63.0%) と高所得層 (10.0%) によるカテゴリー上部の観光者世帯が中核を担っている。

このDTSによる内訳を本調査の結果と比較検討してきたい。図表7「世帯主の所得階層」は調査対象となった学生に対して自分の保護者世帯の年間所得についてたずねたものである (未回答分は除外している)<sup>8</sup>。

図表7 世帯主の所得階層

所得階層	世帯数	%
2万2500ルピーまで	0	0
2万2501から4万5000ルピーまで	1	1.8
4万5001から16万ルピーまで	10	17.9
16万1から50万ルピーまで	33	58.9
50万1から100万ルピーまで	7	12.5
101万ルピー以上	5	8.9
合計	56	100.0

DTSと本調査では手法が全く異なり、かつDTSの調査年は2002年であるのに対して本調査は2010年の結果であることから、単純な比較は妥当とはいえない。しかしながら、DTSによる所得階層区分を踏まえて、大まかな傾向を捉えるためにあえて比較してみると、DTSで極低所得層とされた世帯



は本調査では該当世帯はなく、低所得層に該当する世帯が1.8%のみである。DTS（特に都市部）で中核となっていた中所得層は17.9%、高所得層とされた世帯は80.3%を占めており（図表7では便宜上、これ以上の所得階層を50万ルピーごとに区切っている）、要するにDTSで中所得層以上となっていた階層がほとんどを占めている。

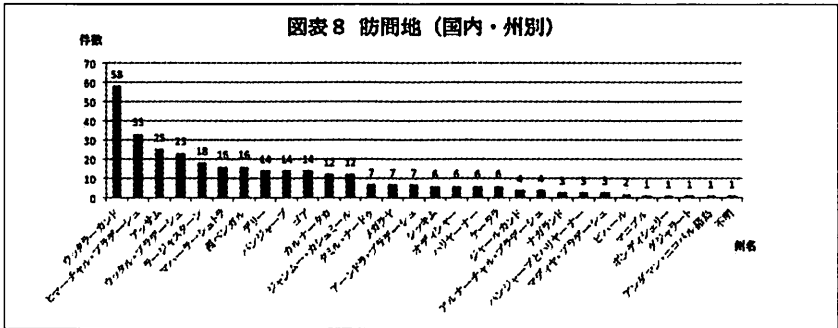
ただし、本調査とDTSの所得レベルの差をもって、所得階層全体の収入が上がっていると単純化はできない。この間のインフレ率や購買力などを勘案して精査する必要がある。実際のところ、先述のインド国立応用経済研究所による中間層の定義（所得階層の設定）も1990年代初頭と2000年代に入ってからでは大きく異なっている。同研究所による1990年代初頭の定義では、中間層は年間所得が3万6,001から7万8,000ルピーと設定されていた[中谷2010: 147]。しかし、2005年時点の定義では、中間層は年間所得が20万から100万ルピーの階層とされ、この階層が1,700万世帯存在するとされている[中村2008: 30]。本調査では、（図表7とは別途集計すると）この階層に該当するのは42世帯（75%）であった。この点も単純には比較できないものの、本調査の対象となった世帯の多くは近年のインドにおける中間層に概ね合致していると考えたい。

### （3）訪問地

観光経験（観光実施回数）については延べ353件の回答を得た。平均すると、ここ5年間で一人平均4.2回の観光経験を有していることになる。その訪問地は不明の6件を除き、国内324件、海外23件であった。

#### 1) 国内

図表8「訪問地（国内・州別）」は、国内訪問先について州別に示したものである。主要な訪問州とその具体的な訪問地、及びそれらの訪問地の性格を明確にするための範囲内で訪問目的についても言及しながらみていきたい。紙幅の制約もあるので訪問件数が10件を越える訪問州について検討する。



まず、デリーの北東、ヒマラヤ山脈に接するウッタラーカンド州は58件と最も訪問回数が多い。具体的な訪問先としてはランズダウン、マサーリー、ナイニताल、デヘラー・ドゥーンなどのイギリス植民地時代に成立した高原の避暑地・保養地いわゆるヒル・ステーションや、ハリドワール、ケーダールナートなどガンジス川の源流に近いヒンドゥー教の聖地が挙げられている。

33件の訪問回数がみられるヒマチャル・プラデーシュ州も同様に夏の避暑地・保養地が主な訪問先となっている。イギリス植民地時代には統治政府の夏の首都であったシムラーをはじめとして、インドでは珍しく温泉施設のあるマナーリー、クル、チベット亡命政府の所在地としても有名なダルムシャーラーなどが主な訪問先である。これら2つの州の訪問地は、ハリドワールやダルムシャーラーなど海外からの観光客の関心が高い訪問地を除いては、主として国内向けの観光地といえる。いずれもデリーから比較的アクセスしやすい夏の避暑地・保養地として国内ではよく知られている。訪問目的についてもこれらの訪問地では、聖地への巡礼（「宗教」）目的を除いては、大多数が「レジャー・ホリデー」である<sup>9</sup>。

3番目に訪問数が多いアッサム州の結果については注意が必要である。図表4「出身州の内訳」で示した通り、回答者の出身州ではデリーに次いでアッサム州から来ている学生が多い。訪問数25件のうち、アッサム州の出身者による回答が19件を占めていることから、訪問目的については「帰省」が9件、「親族・友人訪問」が6件、「社会的目的」が2件と、合わせて7割近くを占

めている。「レジャー・ホリデー」目的の訪問地としては、カジランガ野生動物保護区、アホム王国関連の遺跡、茶園などが挙げられている。

訪問件数23件のウツタル・プラデーシュ州については、世界文化遺産のタージ・マハルを擁するアグラ、ヒンドゥー教の聖地であるヴリンダーヴァンやマトゥラーなど主な訪問地である。訪問目的としては、「レジャー・ホリデー」が8件と最も多く、その他「宗教」「社会的目的」「親族・友人訪問」がそれぞれ3件などとなっている。

訪問件数18件のラージャスターン州も国内観光では人気の訪問先である。かつて有力な藩王国がいくつも存在し、現在でもそれぞれの城塞、宮殿、離宮などが残り、ホテルやレストランなどに転換されて運用されているものもある。民族衣装なども独自性と多様性があり、国内観光客にとってもエキゾチックな印象をもたれているのがこの州である。ジャイプル、ウダイプルなどが主な訪問地である。観光目的では18件のうち、12件が「レジャー・ホリデー」、「親族・友人訪問」が3件などとなっている。

マハーラーシュトラ州（訪問件数16件）はインド最大の都市ムンバイを抱える。訪問地としてもこのムンバイや歴史学園都市であるプネーなどが主なものとなっている。訪問目的としては「親族・友人訪問」が7件を含む「レジャー・ホリデー」が9件と最も多い。また、ナーンデドに所在するシク教10代目の教主に因む著名なシク教寺院（グルドワラー）への「宗教」目的も2件みられる。

同じく16件の西ベンガル州では、イギリス時代に長らく首都が置かれていた植民都市コルカタが州都となっている。しかしコルカタへの訪問件数は5件にすぎず、最も多いのはダーズリン・ティーで有名なダーズリン方面への9件である。ダーズリンは現在でも紅茶の生産で有名なだけでなく、インド東部側の高原避暑地・保養地であり、動く世界文化遺産、「ダーズリン・ヒマラヤ鉄道（インドの山岳鉄道群）」も走っている。また、世界自然遺産の「スンドルバン国立公園」への訪問も1件だがみられる。

デリー（14件）は、回答者達が通う大学が所在する場所である。「レジャー・ホリデー」ないし「学習」目的の友人同士での日帰り訪問という形が8件と

## 論文

最も多い。訪問地としては世界文化遺産のクトゥブ・ミーナールやレッド・フォート、イギリス時代のインド門など、そしてチャットールブルやアクシャルダームなど近年新たに建設されるようになった巨大ヒन्दウー教寺院などが挙げられている。また、シク教の第8代教主に因むシク教寺院への「宗教」目的の訪問も2件みられた。

バンジャープ州（14件）にはシク教の総本山、すなわちアムリツァルの黄金寺院（ダルバル・サーヒブ）がある。14件のうち最も多いのは、ヒन्दウー教徒とシク教徒を問わず、ここへの「宗教」ないし「宗教」と「レジャー・ホリデー」を合わせた5件である。このほかには、インドとパキスタンの分離独立後、新たにフランスの著名な建築家ル・コルビュジエの設計によって建設された新首都チャンディーガルへの訪問がみられた（ただし目的は「親族・友人訪問」「帰省」が主）。

ゴア州（14件）はポルトガルの植民地としての歴史を有する。日本でキリスト教を布教したフランシスコ・ザビエルはここから日本へと渡った。ただし、観光地としてのゴアはポルトガル時代の歴史遺産という面とともに、インド有数のビーチリゾートとしても認知されている。14件の回答すべても家族や友人との「レジャー・ホリデー」を目的としている。

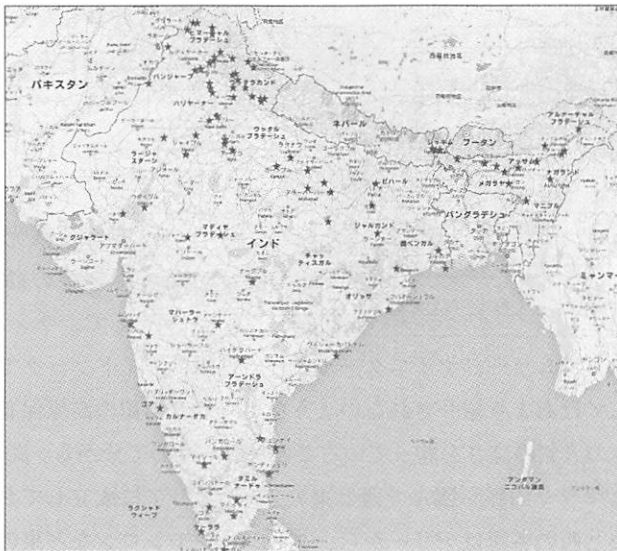
カルナータカ州に関しては、訪問数12件のうち10件をインドのIT産業の拠点として有名なベンガロール（バンガロール）が占めている。目的については「レジャー・ホリデー」との回答はなく、「親族・友人訪問」「学習」「その他」（会議への参加など）などである。他方、かつてのマイソール王国が所在したマイソールへの訪問が2件あるが、こちらはすべて「レジャー・ホリデー」目的である。

ジャンムー・カシュミール州はインドの北西端に位置し、領土をめぐるパキスタンとの係争地となってきたが、本来は風光明媚な景勝地として知られている。12件のうち、7件がヴァイシュノ・デーヴィーというヒन्दウー教の聖地への「宗教」目的での訪問である。その他には、州都のシュリーナガルや豊かなチベット文化を受け継ぐラダック、レーなどを訪問する「レジャー・ホリデー」となっている。以上、訪問数上位の計12の州について検

討してきたが、図表8にみる通りこれら以外にも17の州が訪問対象となっている。訪問地も歴史都市、景勝地、国立公園、避暑地、聖地・寺院など非常にバラエティに富んでいる。すべて合わせると、インドの28州と7つの連邦直轄地のうち、26の州と3つ（図表8には挙げていないチャンディーガルも合わせると4つ）の連邦直轄地が訪問対象となっており、調査対象は学生のみであるにも関わらず、ほぼインド全域に訪問地が広がっていることが分かる。

図表9「訪問地分布（全土）」は訪問地の回答について、不明のもの及び便宜上ジャンムー・カシュミール州の4カ所を除くすべて、すなわち117カ所（★印）について地図上にプロットしたものである。この図をあらためてみても、訪問地がインド全土に広がっていることが分かる。特に、デリーの北方方面へは、ウッタラーカンド州やヒマーチャル・プラデーシュ州のヒルステーション地域に向けてラインを描くように訪問地が集中している。

図表9 訪問地分布（全土）



（出典：Google マップをベースに筆者作成）

## 論文

また、同様のラインはデリーからインド西部のラージャスターン州やアーグラ、マトゥラー、ラクナウ、アラーハーバードなどのウツタル・プラデーシュ州方面へも延びている。東部についてはコルカタやコルカタ方面からのヒルステーションであるダージリンやシッキム州にも訪問地の集中がみられる。なお、北東部のアッサム州に訪問地が多いのは、回答した学生にアッサム州出身者が多くみられたからである。この他、インド西部のムンバイやゴア、南部のケーララ州やタミルナードゥ州への訪問もみられる。

図表10 訪問件数上位10位の目的地

目的地	件数	特徴
ランズダウン	14	ヒマラヤ山麓の高原保養地
マスーリー	12	ヒマラヤ山麓の高原保養地
ゴア	12	国際的な海浜保養地。旧ポルトガル植民地
シムラー	12	ヒマラヤ山麓の高原保養地
アーグラ	11	タージ・マハルなどムガル帝国時代の歴史遺産
ベンガルール	10	南インドの高原保養地。IT都市
ナイニタール	10	ヒマラヤ山麓の高原保養地
ムンバイ	9	インド最大の都市
ジャイプル	9	藩王国時代の歴史遺産
ダージリン	8	ヒマラヤ山麓の高原保養地。茶園。鉄道遺産
デリー	8	首都、ムガル帝国時代の歴史遺産
グワーハーティ	8	アッサム州の州都
ハリドワール	8	ヒマラヤ山麓の高原保養地。宗教聖地
マナーリー	7	ヒマラヤ山麓の高原保養地
アムリツァル	6	シク教の総本山(黄金寺院)
ヴァイシュノ・デーヴィー	6	ヒマラヤ山麓の高原保養地。宗教聖地
シロン	6	北東部の高原保養地
チャンディーガル	6	独立後建設の新都
プリー	5	海浜保養地、宗教聖地
ハイダラーバード	5	旧イスラーム藩王国時代の歴史遺産
デヘラー・ドゥーン	5	ヒマラヤ山麓の高原保養地
コルカタ	5	イギリス植民都市の歴史遺産
ラーンチー	4	ジャールカンド州の州都
ラクナウ	4	ウツタル・プラデーシュ州の州都。ムガル帝国時代の歴史遺産
チェンナイ	4	イギリス植民都市の歴史遺産

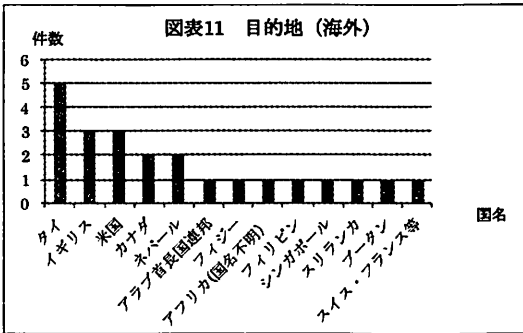
最後に、図表10「訪問件数上位10位の目的地」は、州単位ではなく、より具体的な目的地として上位に上がった訪問地を列挙したものである。これをみると、ゴア、アーグラ、ベンガルール、ムンバイ、ジャイプルなどの国内外の観光客にとって定番の訪問地に加えて、ランズダウン、

マスーリー、シムラー、ナイニタールなど、日本のガイドブックでは主要な観光地としてはあまり紹介されないようなヒマラヤ山麓の高原保養地・避暑地がかなりの人気の高さを誇っていることがあらためて分かる。高原保養地・避暑地はヒマラヤ山脈を臨んで西と東の2つのエリアに成立しており、ランズダウンなど西の各所はデリーから、ダージリンやシロンなど東の各所は東インドの大都市コルカタ方面からのアクセスが一般的となっている<sup>10</sup>。

ハリドワール、アムリツァル、ヴァイシュノ・デーヴィー、プリーなどのヒンドゥー教やシク教関連の宗教聖地がいくつも含まれていることも特徴的である。イスラーム教に関しては、インド全体の人口比では約13%も占めているにもかかわらず、本調査では回答者のなかにイスラーム教徒が1名しか含まれなかったこともあり、イスラーム系の宗教施設や聖地に関するデータが明確には得られなかった。

## 2) 海外

図表11「訪問地(海外)」は、23件あったインド国外への訪問数の内訳である。タイについては5件の家族、親族、友人を伴う「レジャー・ホリデー」、



イギリスの3件はすべて家族での「レジャー・ホリデー」だが、うち1件は同時に「親族・友人訪問」も兼ねている。米国は単独での「社会的目的」と友人との「学習」がそれぞれ1件と、「学習」を兼ねた

両親との「レジャー・ホリデー」が1件、カナダの2件は家族・親族での「レジャー・ホリデー」(うち1件は親族訪問を兼ねる)、ネパールは家族での「レジャー・ホリデー」と「宗教」が各1件である。各1件ずつとなっているアラブ首長国連邦、アフリカ(国名不明)、フィリピン、シンガポール、スリランカ、ブータン、スイス・フランス等はすべて「レジャー・ホリデー」目的の家族旅行である(スリランカのみ「社会的目的を兼ねる」。フィジーは留学生の帰省である。サンプルは少ないものの、南アジアの他国や東南アジアに向けては、より純粋なレジャー目的の家族旅行が行われていることがうかがわれる。また、イギリス、米国、カナダなどはインド系の移民を多く抱える国々であり、現地に居住する親族・友人を訪ねる形で、ないしはそれを伴う形でレジャー目的の家族旅行が行われていると考えられる。

#### (4) 訪問目的

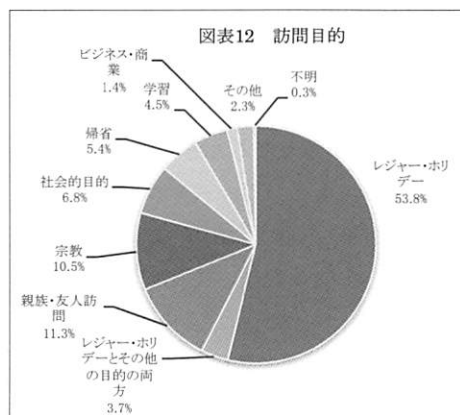
ここでは全般的な傾向を明らかにするためにDTSの調査結果と比較しながら国内と海外を含めて訪問目的について検討する。まずDTSでは観光目的は「ビジネス・商業」、「レジャーやホリデー」、「宗教や巡礼」、「社会的目的」の4つに分類され、「社会的目的」はさらに「友人・親族訪問」、「生誕・死去」、「結婚」の3つに下位分類されている。途上国では一般に「友人・親族訪問」は観光の重要な要素であり、インドも例外ではない。これに加えて、インドでは様々な人生儀礼の機会に人々が集まる。「生誕・死去」とは子どもの生誕に関わる儀礼と葬儀や祖霊祭など、「結婚」は婚姻儀礼であるが、なかでも婚姻儀礼は多くの人々が遠方から集まる機会となっている。DTSではインドの事情を反映させるアレンジがなされている[中谷2010: 138-39]。

さて、DTSでは、2002年の調査年には全国で2億3000万回の観光数 (trip) をカウントしている。うち、6100万回が都市部の住民によって、1億6900万回が農村部の住民によって実施されている。そして観光者世帯あたりでは平均2.64回の観光にでかけているとしている[DTS: 13]。

訪問目的に関しては、「社会的目的」が最も大きなパーセンテージを占めており、農村部では61%、都市部でも53%となっている。「社会的目的」の内訳は、農村部と都市部を合わせた全体で「友人・親族訪問」が49%、「結婚」が33%、「生誕・死去」が18%である[DTS: 13-14]。DTSの報告書は、グラフのみ掲げていて数値を示していない部分も多い。グラフから大体のパーセントを読み取るならば、「社会的目的」以外のパーセンテージは、全国で「ビジネス・商業」は8%、「レジャーやホリデー」は6%、「宗教や巡礼」は14.5%となっている。農村と都市を比較すると、「ビジネス・商業」と「レジャーやホリデー」については、農村部では両方とも5%前後であるのに対して、都市部では両方とも10%前後である。「宗教や巡礼」は(なぜかここだけきっちり数字が文章で記されているのだが)、農村部の13%に対して、都市部の方が16%と若干高い[ibid.: 中谷2010 141]。

本調査の質問項目も基本的にこれを踏まえたものである。論文末に添付の質問票(調査票)の通り、「レジャー・ホリデー」「宗教」「親族・友人訪問」





「学習」「社会的目的（結婚その他）」「ビジネス・商業」「その他」という項目をおいている<sup>11</sup>。

図表12「訪問目的」が示す通り、DTSの結果と最も対照的なのは、本調査では「レジャー・ホリデー」と「レジャー・ホリデーとその他の目的の両方」を合わせて、57.5%となっていることである。つまり、DTSでは農村

で6割、都市で5割と圧倒的な割合を占めていたのに対して、本調査では同様に6割の割合を占めているのは「レジャー・ホリデー」となっている。今やインドの人々の観光は「社会的目的」から「レジャー・ホリデー」へと大きく転換している可能性を示しているといえよう。

ただし、本調査の対象は学生であり、所属する世帯は職業別では自ら事業を営む事業主やホワイトカラー層が9割、所得階層別ではDTSでは高所得層とされた16万1ルピー以上の世帯が8割であることを留意する必要がある。DTSでは残念ながら、所得階層別の観光目的内訳については記述がない。あるのは観光目的別の所得階層構成である。本調査の回答者と重なる16万1ルピー以上の高所得層についてはサンプルとなった世帯数が少ないために（全体の4.9%）、どの観光目的別でも目立たないものの、この階層が4つの目的カテゴリーのなかで最も大きな割合を占めているのは「ビジネス・商業」と「レジャーやホリデー」で、それぞれ1割程度を占めている。つまりこれら2つのカテゴリーではこの階層の存在感がやや大きい。これと対照的に、極低所得層と低所得層ではこれら2つのカテゴリーにおける存在感は小さい。高いのはむしろ「宗教や巡礼」と「社会的目的」においてである [DTS: 19]。

以上の結果からすると、所得階層が低いほど観光目的は「宗教」と「社会的目的」に志向し、高いほど「ビジネス・商業」と「レジャーやホリデー」に志向することが推測できる。しかし、本調査の結果をこのように単純化して

読み取るのだけでは不十分である。所得階層が高くなると「宗教」や「社会的目的」に代わって「レジャー・ホリデー」や「ビジネス・商業」が増えるというよりも、「宗教」や「社会的目的」に加えてこれらの件数が増えることで、結果として「宗教」や「社会的目的」の割合が小さくなると考える方がむしろ妥当であろう。実際のところ、本調査においても「レジャー・ホリデー」が6割近くを占めるとはいえ、同時に「宗教」目的との回答は10.5%あり、訪問地（巡礼地）についても明確な回答がなされている。「親族・友人訪問」（11.3%）と「社会的目的」（6.8%）も合わせて18.1%の回答があった。いずれのカテゴリーも決して無視できるものではなく、むしろ非常に確固たる存在感を放っているのである。

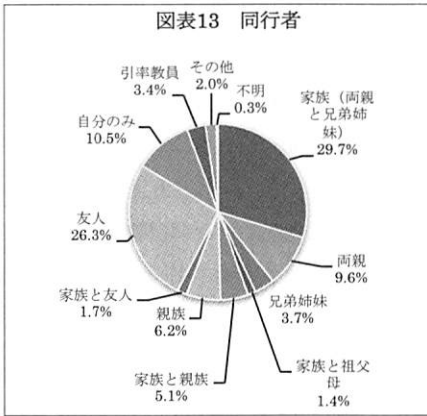
本調査の特殊な点は、調査対象が学生であるため、「ビジネス・商業」という回答はほとんどみられなかったことと<sup>12</sup>、「帰省」（5.4%）や「学習」（4.5%）という項目が一定程度みられることである。「帰省」については、近くはパンジャブ州、遠くはアッサム州、ジャールカンド州、ナガランド州などで、遠方になるほど数週間単位のより長期で帰省している。「学習」に関しては、大学ないし所属学科の企画により教員が引率する泊まりがけの研修旅行や日帰りでの視察などが含まれている。

### （5）観光形態（同行者、期間、交通、手配者、宿泊）

図表13「同行者」は誰と一緒に観光に出かけたのかを示している。調査票ではこの点について、「父」「母」「兄弟姉妹」「祖父母」「親族」「友人」「その他」と細かい選択肢をおいたうえで、複数選択するようになっていた。よって、図表13もその区分に基づいている。

これによると、両親と兄弟姉妹つまり「(核) 家族」の形が29.7%と3割近くを占めていることが分かる。さらに、「両親」のみ（9.6%）、「兄弟姉妹」のみ（3.7%）、「家族と祖父母」（1.4%）などの形を含めると家族での行動が44.4%となる。加えて、「家族と親族」（5.1%）、「親族」（6.2%）も含めると、家族や親族など55.7%となり、過半数のケースにおいて家族・親族のみと一緒にでかけている。

図表13 同行者

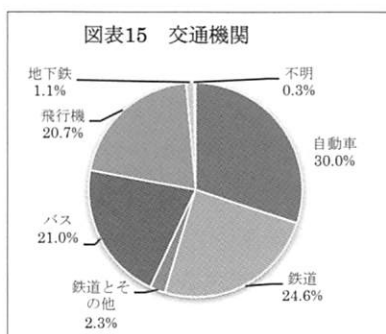
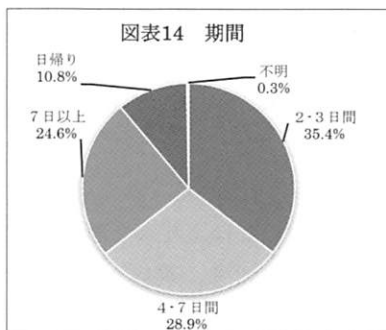


他方で、家族旅行のなかに友人がいたり（「家族と友人」1.7%）、「友人」（26.3%）のみと連れだっていたり、友人との行動もかなりみられるのが特徴的である。「友人」のみに関しては、友人を連れて実家に帰省したり、親族・友人訪問の際に友人を伴ったり（あるいは伴われたり）、日帰り宗教施設と一緒にたずねたり、そして大学の

企画で友人とともに行動したという形がみられる。だが、これら以外に日帰りでもなく、家族・親族や友人宅に泊まることもなく、ホテルやゲストハウスに宿泊する形で「レジャー・ホリデー」目的で友人とでかけたというケースが「友人」全体93件のうち45件もあることも興味深い。ゴア、シムラー、ランズダウン、マサーリー、ダーズリンなどへ、旅行代理店を通じて、あるいは自分自身や友人がアレンジする形で「レジャー・ホリデー」を過ごしてきたというのである。この点は、筆者としては俄に信じがたいところもあるが、本調査のような簡易な質問紙調査では詳細をうかがい知ることにはできない。今後、詳細なインタビュー調査を要すると思いたい。

「自分のみ」（10.5%）については、ほとんどが「帰省」「社会的目的」「親族・友人訪問」であり、かつ「レジャー・ホリデー」との回答の場合であっても宿泊先は全て親族ないし友人宅であるので、いわゆる純粋な一人旅的な形態はごく稀である。「自分のみ」の回答数37件のうち、一人旅的なケースは、「単独旅行をしてみたかったので僧院やインを泊まり歩いた」との特記があった1件のみであった。

図表14「期間」は観光の期間を示している。期間については、遠方への「帰省」ではより長期間となっている点以外は、特に「訪問目的」と「期間」の間で有意と思われる相関関係はみられない。なお、「帰省」目的以外で「7日以上」のケースでは、特記がある範囲でみると10日から60日の幅がある。例



例えば、イギリスの親族宅に母と20日間、カナダの親族宅に25日間、国内の親族宅に20日、29日、60日それぞれ滞在したなどの回答があった。

図表15「交通機関」は観光の際に利用した交通機関について聞いたものである。目的地ごとに、それぞれの移動の距離、道路などのインフラの整備状況、家族連れの際の利便性などの点から、異なる利用形態がとられている。まず、「自動車」が30.0%とかなりの割合を占めているのが特徴的である。自動車での主要な訪問地にはウッタラーカンド州やヒマチャル・プラデーシュ州のヒルステーション（高原保養地）が挙げられている。これらヒルステーションへは、デリーから所要時間が6－10時間くらいかかるものの、マイカーないしは自動車を借り上げて直接乗り入れている。ダーズリンやシッキムなど、コルカタ方面からのアクセスが一般的な東のヒルステーションでも同様である。また、パンジャブ州のアムリツァルやラージャスターン州のジャイプル、ウッタル・プラデーシュ州のアーグラなど、デリーからの幹線道路の整備が整っている方面へも自動車が用いられている。また、アッサム州、メガラヤ州、アルナーチャル・プラデーシュ州などの北東州でも自動車が用いられているが、これらはデリー方面からのアクセスというよりも、現地での移動のための利用と思われる。

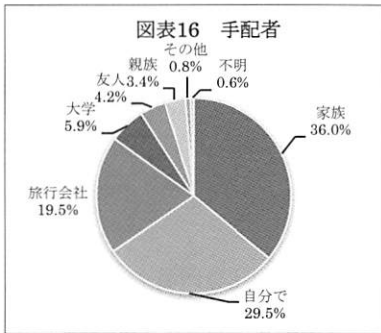
「鉄道」(24.6%)はインドでは最もポピュラーな交通手段といえるだろう。移動範囲については、「自動車」や「飛行機」とも重なり、中・遠距離に対応しており、インド全域に渡って利用されている。回答の状況を見ると、最も遠距離では北東州のアッサム州やナガランド州から南インドのケーララ州や

「鉄道」(24.6%)はインドでは最もポピュラーな交通手段といえるだろう。移動範囲については、「自動車」や「飛行機」とも重なり、中・遠距離に対応しており、インド全域に渡って利用されている。回答の状況を見ると、最も遠距離では北東州のアッサム州やナガランド州から南インドのケーララ州や

タミルナードゥ州まで利用されている。

「バス」(21.0%)もインドでは一般的な交通手段である。訪問地との関係では「自動車」と重なる部分が大きく、ウッタラーカンド州やヒマーチャル・プラデーシュ州のヒルステーションやラージャスターン州のジャイプル、ウッタル・プラデーシュ州のアーグラなどへの移動手段となっている。

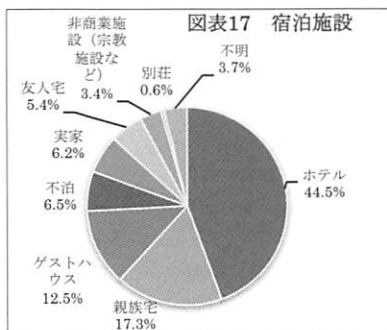
「飛行機」(20.7%)は海外渡航の場合やアッサム州やメガラヤ州などの北東州、あるいはゴア州、マハーラーシュトラ州、カルナータカ州など西・南インドへの訪問の際に利用されている。「地下鉄」については、デリー市内を日帰り観光した際の利用である。



図表16「手配者」は観光に出かけるにあたって、誰がアレンジしたかを示している。この点については、「目的地」「交通機関」などに応じて、特徴的な傾向はみられない。海外であっても「家族」がアレンジしていたり、比較的近場のヒルステーションであっても、「旅行会社」を通じてアレンジしていた

りである。そして、全般的にみると「家族」(36.0%)と「自分で」(29.5%)を合わせて65.5%とあるように、でかける本人たちが自分でアレンジしているケースがかなり多く、「旅行会社」を通じてのアレンジは19.5%にすぎない。ただ、近年インドでもオンラインの旅行会社が興隆しており、飛行機、鉄道、宿泊の予約を直接個人でも手軽にできるようになっているので、「家族」「自分で」との回答に、これらを利用したケースも含まれている可能性がある。

最後に、観光に出かけた際の宿泊について図表17「宿泊施設」に示している。まず、「ホテル」(44.5%)や「ゲストハウス」(12.5%)などの商業宿泊施設への宿泊が57.0%を占めているが、この点は訪問目的が「レジャー・ホリデー」と「レジャー・ホリデーとその他の目的の両方」を合わせて57.5%となっていることと対応しているといえよう。「親族宅」が「ホテル」に次いで多いのは、「親族・友人訪問」目的以外にも、「社会的目的」「宗教」さらには



「レジャー・ホリデー」目的についても宿泊については「親族宅」との回答がみられるためである。このほか、「友人宅」に加えて、「学習」目的で訪問先大学のホステルで宿泊、宗教施設での宿泊など「非商業施設」での宿泊もみられる。なお、図表14「期間」において、「日帰り」が10.8%となっているのに対して、

「不泊」は6.5%となっている点は齟齬を感じる点である。しかしこれは、ひとつの回答のなかで、宿泊の項目は親族・友人宅やホテル・ゲストハウスに宿泊と記入しながら、特定目的地への訪問については別途宿泊していないとのことで、期間の項目では「日帰り」と記入しているケースが幾つもみられるためである。

## (6) 小括

質問紙調査の結果からは「ビジネス」「給与所得者」「専門職」を中核とする中間層の人々が従来の「社会的目的」「親族・友人訪問」「宗教」などの動機にもとづく観光も確固たるものとして維持しながら、「レジャー・ホリデー」のためにインド国内各地や海外へ数多くでかけていることが明らかとなった。また、その訪問地は歴史都市、景勝地、国立公園、ヒルステーション、聖地・寺院などバラエティに富むもので、領域としてもほぼインド全域に訪問地が広がっている。とりわけ、日本のガイドブックでも定番として紹介されているところだけではなく、あまり紹介されていない国内観光客向けといえるようなヒルステーション（それも西と東の両方）が人気の訪問地となっていることも特徴的である。

## 4. インドにおける観光事情

本章では、インドにおいて観光行動が実践されるコンテキストについて検討してみたい。まず第1節では観光行動が成立する大きな前提のひとつであ

る休暇制度や旅行手配の形態について検討し、第2節では質問紙調査結果でかなりの割合を占めていた「レジャー・ホリデー」目的の観光について、筆者が同行した家族旅行の事例について紹介する。

### (1) 休暇制度や旅行手配について

質問紙調査の対象は大学の学部生・大学院生ゆえに観光経験に関する回答においては、大学が企画する「学習」や「帰省」なども含まれていた。しかし、同伴者でみると観光経験（件数）の過半数は家族・親族と一緒にでかけたものである。インドでは家族旅行が一般的というのがあらかじめの認識であろう<sup>13</sup>。

そうすると、勤労者である世帯主がどのような休暇制度のもとにあるかはひとつの重要なポイントである。

インドは2010年に日本政府が進めるビジットジャパン事業のプロモーション対象市場となったことで[石崎2011: 169]、日本政府観光局は『国際観光白書』において観光（外国旅行）に関するインドの社会状況について概説している。抜粋すると次の通りである。すなわち、インドは高い経済成長率を維持しホワイトカラー層の給与の伸びも年間10%から15%と高い水準にある。インドの労働基準関係法令では、1日の労働時間は9時間以内（うち休憩1時間）、1週間の労働時間は48時間以内で、1週間に1日の休日を与えることが定められている。インド全土共通の祝日が14日ないし15日、地域限定の祝日が4日ある[日本政府観光局2010: 309-310]。

学校休暇の時期は地域や教育機関によって異なり、北部と東部では夏期休暇が5月－6月で冬期休暇が12月中旬－1月初旬、南部と西部では夏期休暇が4月中旬－6月初旬で冬期休暇が12月下旬－1月中旬である。要するに夏期休暇が1ヵ月半から2ヵ月、冬期休暇が2－3週間ある。また学期を分割している学校では中間休暇として1－2週間の休暇が年に2－3回設定されている[ibid.: 310-11]。

休暇制度については、一般に公務員は60日以内、民間企業の会社員は30-45日の有給休暇が付与される。また、政府・民間ともに完全週休二日制を採用する所が増えつつあるが大半は日曜日のみを休日としている。インドでは短期休暇が一般的で、休暇時期は季節によるところが大きく、ピークは

夏、クリスマス、正月である [ibid.: 311]。

以上の解説によれば、インドでは国民の祝日や学校の長期休暇もかなりあり、労働時間についても法令で定められ、有給休暇などの休暇制度も整っているように見える。もちろん、これらはいわゆる組織部門の労働者の話であり、非組織部門や第一次産業部門では事情は大きく異なるであろうが、仕事と余暇が弁別される余暇社会の側面が明確に存在することを示している。

インドでは余暇、それも観光という形での余暇生活の促進は有給休暇にとどまらず、さらに制度的な面で促進されている面もある。上記の白書では触れられていないが、例えばインドでは国家公務員については「休暇旅行特典 (Leave Travel Concession)」という休暇制度が利用できる。これは実家への帰省であれば2年に一度、その他の国内であれば距離に関係なく4年に一度、移動に要する費用を全て政府持ちで旅行ができるという特典である<sup>14</sup>。観光業界としてもこの制度の利用者は上客となっており、週末の項目別新聞折り込み広告の旅行欄にはLTC (この制度の略称) の文字が躍り、インターネット上でも「LTC ツアーパッケージ (LTC Tour Package)」と掲げる旅行会社のサイトが数多くみられる。なお、現在では一部で海外利用も可能とのことで、海外のLTC ツアーパッケージもこれら業者が提供している。

この制度は積極的に利用されているようで、質問紙調査で協力を得たデリー大学のダスグプト教授も国立大学の教員であるのでこの制度を利用しているとうかがった。同教授によれば、一緒に旅行する家族の費用も支給してくれるし、インド国内であればどれだけ遠くへ行っても交通費が支給されるので、みな近くではもったいないとしてデリーからであればダージリンやケーララ州、さらにはアンダマン・ニコバル諸島までなど、遠方へ行くのが人気だそうである。役職によって支給される交通機関のランクも差があり、准教授であれば列車のファーストクラスのところを教授職であれば飛行機利用が可能とのことだ<sup>15</sup>。

なお、民間や地方政府の公務員にはこのような特典は用意されていない。とはいえ、インドでは民間の給与水準は公務員を遙かに超えるケースも珍しくないで、海外も含めて行こうと思えば自腹でもって、いくらでも出かけ



られるということらしい<sup>16</sup>。

民間については豪勢な特典はなくとも、また高所得者ではなくとも、有給休暇等を活用して可能な範囲で旅行することは一般的である。例えば、かつて筆者の調査助手を務めてくれていたA氏（50歳代前半、民間会社勤務）によると、彼の会社では年間30日の有給休暇に加えて、臨時休暇や病欠休暇も取得可能だそうである。病欠休暇は月ごとに1日の取得が可能で、これは2年間貯めることができる。ただし、3日以上連続して休む場合には医師の診断書が必要である。このように、かなり細かく決まり事があるらしい。A氏はこれらの休暇制度についてとても意識的であり、有効活用しようと常に考えていると述べていた。ちなみに、2009年時点でこれまでA氏が訪問した場所は、インド北部のデヘラー・ドゥーン、ハリドワール、アーグラ、西部のグジャラート州、ラージャスターン州、中央部のパチマヒー、東部のコルカタ、プリー、南部のムンバイ、チェンナイ、ベンガルール、マイソールなど各地に渡っている<sup>17</sup>。これらはいずれも家族旅行である。友人や同僚から口コミで観光地について良いところがないか聞いたり、そのうえで現在ではインターネットで訪問地の詳細や宿泊先のグレードについてチェックしてみたり、政府系の旅行代理店やオンラインの民間旅行会社も利用しているようだ。

最後に、これは筆者の個人的見解によるところが大きいですが、インドの旅行手配の状況について少し触れておきたい。従来、インドでもっとも手軽なお出かけに「ピクニック」と呼ばれるものがあつた。端的にいうと家族や友人同士などで景勝地等へ調理道具や食材を持ってでかけて、到着地において自分たちで料理をして食べてまた戻ってくるというレジャーである。ピクニックは現在では行われていないという訳ではないが、要するに交通から食事まですべて自前で準備して行われる日帰りレジャーである。

このような自前の旅行は宿泊を伴うような場合にも実践されてきた。近隣や職場で旅行に関心の高い人物が、まずは日帰り近場へ、回数を重ねて経験を積んできたならより遠くへ宿泊を伴うような旅行を自らボランティアで企画し、自分でバスなどの交通や宿泊の手配をして催行するのである。その際には、宗教的な聖地巡礼と歴史的史跡、景勝地などの観光スポットがひとつ

の旅程の中に組み込まれるような形も取られる[Nakatani 2003: 137]。また、村落において、村の裕福な農民が自らトラクターを提供することで聖地巡礼団を組織し、荷物や飲料水、途中で歩けなくなった人の運搬を担うことで誰もが巡礼に参加可能となっているような事例も報告されている[中谷2009: 74]。このように、有志による企画・催行によって、旅行業者が関与しない形での観光・巡礼がインドでは行われてきたのである。

聖地巡礼と一般的な観光の組み合わせ、ないし巡礼の傍らで観光という形態以外にも、インドでは様々な「ついで観光」がみられる。例えば、インドでは各地方を代表するような大きな祭り際には休日が付くこともあり、実家を離れて暮らしている娘が夫や子どもを伴って遠方から里帰りする様子がよくみられる。帰省自体がひとつの旅行であるし、帰省がてら実家とは別に、実際に観光地もついでに回ってくることも行われている。また、結婚式は遠方で行われることも珍しくはないので、ここでもやはり結婚式への出席のついでに観光地を回ってくるが行われている。このような場合には、旅行業者が介在するケースは少ないと思われる。

旅行業者があまり介在しない、このようなインド的な観光形態がある一方で、日本におけるオンライン旅行業と同等といえるようなサービスがすでにインドでも展開されている。今日その興隆によって、実店舗型の旅行会社の存在感は薄くなっていると思わせるほどである。代表的なオンライン旅行会社には「MakeMyTrip」、「Yatra.com」、「Travelguru」などがある。これらサイトでは国内外の飛行機、飛行機と宿泊のパッケージ、各種パッケージツアー、ホテル予約、長距離列車、長距離バス、タクシー（空港リムジンや長距離ハイヤー）などがオンラインで予約可能である。宿泊施設については、トリップアドバイザーと連動していて、顧客レビューも同時にチェックできるようになっている。クレジットカード、デビットカード、ネットバンキングなどによってオンラインでの決済が可能である。

以上のように、インドでは家族、職場、地域ベースでの自前催行からオンライン旅行会社利用によるお手軽なアレンジの形まで、いくつものレベルでの旅行手配の形が共存しているのである。

## (2) 事例—家族旅行(レジャー・ホリデー)

ここで紹介するのはうえに引用したA氏の家族旅行である。これに筆者も同行させていただいた。以下、多少、筆者の主観的なコメントも含めながらその行程について略述してみたい。

日程：2009年3月26日・27日(一泊二日)

目的地：コルベット国立公園(Corbett National Park)

現在のウッタラーカンド州に所在し、1936年に設置されたインドで初めての国立公園。野生虎の保護区としても有名。

家族構成：A氏・夫(1961年生まれ)、妻、娘、息子

デリー在住。A氏は民間会社社員、妻はインドの伝統医療ホメオパシー専門医で、夫婦あわせて月収4万ルピーほど。娘は日本では中学生、息子は小学生に相当。2008年にはマイカーを購入。

まず旅行のきっかけである。A氏が勤務する会社では、3月が年度末で締めとなるのだが、A氏にはまだ有給休暇と病欠休暇を合わせて18日分も未消化の休暇が残っていた。すべてを今から消化できないにしても、子どもの学校の定期試験も終了して休みがあるので、2日分くらいは消化してどこかへ行こうと夫婦の間で話がでたことが旅行計画のきっかけであった。当初、訪問先については、夫は会社の同僚からデリーの隣州にあるヒンドゥー教の聖地クルクシュートラがなかなか良いと聞いて候補地として考えていた。しかし、これに対しては妻が「え、何でそんなところへ行くの?」「いったいそこには何があるの?」「何見るものがあるの?」と述べて合意にはいたらなかった。そこで妻が「シムラーはどう?」と提案したが、これにはA氏が「シムラーは遠すぎる。片道10時間かかる。2日間では無理だ」と述べて却下となった<sup>18</sup>。その後、夫婦で相談した結果、子どもが喜びそうなところということで、キャンプやサファリができるコルベット国立公園へ出かけることとなった。

A氏は通常の有給休暇を取ることもできるはずが、上司が休みをくれない可能性もあるので、歯が痛いと言って2日間の病欠休暇を取得した。会社支

## 論文

給の携帯電話もデリーの自宅に置いていった。ちなみにA氏の服装は、休日のレジャーだからといって何か違いがある訳ではなく、いつも仕事に出かける際と同じようなワイシャツにスラックス姿であった。

現地までは、近所の知り合いのタクシー会社から運転手つきでミニバンを借り上げた。3月26日、07:30に出発した。運転手は道を熟知していた。運転手に話を聞いてみると、シムラーなどの比較的近郊への往復は朝飯前で、ラージャスターン周遊、アッサムのシルチャル、オディシャー、ムンバイーなどへも自動車でも客を案内するとのことであった。ムンバイーだと10日以上かけて、色々なところを見て回りながら周遊するそうだ。また、車両は通常のデリーでの登録だと他州には乗り入れができないので、他州へも乗り入れが可能となるための特別な許可を取得しているとのことであった。州によっては他州からの乗り入れ車両に通行料を課している場合があり、この時の行程では、ウッタル・プラデーシュ州に乗り入れる際には、行きと帰りで2日分の通行料として700ルピーを徴収された。

現地への道のりは、一部で渋滞したが、道路状況はおおむね良好であり順調なドライブが可能であった。片道2車線で中央分離帯もある有料バイパスが続き、それが終了したあとは片道1車線となったものの、各所で拡張工事が進められており、道路整備が急ピッチで進められている様子がうかがわれた。小学4年生の息子(弟)は途中、車酔いで嘔吐した。

14:00、コルベット国立公園の最寄りの町であるラームナガルに到着。宿泊の予約を事前にしていなかったため、ドライバーに聞いて政府系の現地ツーリスト・オフィスを訪ねた。ここで、町中の宿泊施設以外にも、8キロほど進んだところの河畔にもこのオフィスが運営するキャンプ・スタイルでのテント泊ができる施設もあると聞いて、そちらで宿泊することにした。ここへの道のりも道路がよく整備されていた。観光客を乗せる乗用車、トラックなどととも、観光用の象が歩く姿も見られた。

宿泊施設は「ホリデー・キャンプ」という名称だった。テントは常設型のもので天井も高く、簡易ベッドが3つ設置されていてまずまず快適なものであった。宿泊費用は弟分が無料で4名分の計算で1600ルピーを前払いした。

荷物を置いてから、この宿泊施設で昼食を取った。A氏は自分の携帯電話からデリーにいる父親へ、現地に着いたからと電話を入れていた。

宿泊施設の裏手にある川へいった。この川はガンジスに繋がっているとレセプションで聞いて、妻と子どもたちはとても喜んでいて。弟が早々に水遊びをして服を濡らして怒られたが、結局、姉も妻も川に浸かってしまった。それから国立公園内のダンガリ・ゲートという所に博物館があるというので向かったが、開館時間を過ぎて閉まっていたのでラームナガルの町へ出た。途中で野生の鹿を目撃して子ども達は歓声を上げていた。

コルベット国立公園内は大きく5つの区画に分かれているが、いずれも訪問者は自家用車で乗り入れることはできず、認可業者の車両のみが乗り入れを許可されている。徒歩での散策もごく一部を除いて禁止である。そして公園内の虎保護区に入るには事前に許可を所得する必要がある<sup>19</sup>。

よって、この日のうちにドライバーと知り合いのジープ・サファリの業者と連絡を取り、政府のインフォメーション・予約センターの前でA氏と業者が交渉し1,800ルピーで明日のサファリ・ツアーを予約した。

娘(姉)の方が、道端で売られていた竹製の電灯笠と小舟の置物をほしがり購入した。宿泊施設の食事はあまりおいしくなかったのも、ラームナガルの町でダール(豆スープ)やチャパティ(薄焼きパン)などごく普通の夕食を食べた。ホリデー・キャンプに戻り、テントで就寝する際に、弟をはじめA氏と筆者との3人で同じテントで寝るはずであったが、怖がったのでA氏の代わりに姉が来て一緒に寝た。

3月27日、午前5:30に昨晚のインフォメーション・予約センターへ入園許可の取得に向かった。外国人の筆者も含めて、書類の記入と料金の支払いのみで簡単に入園許可を取得した。一旦ホリデー・キャンプに戻って待っていると、7:00頃に昨晚予約した業者がジープで迎えに来た。30分近く走って、途中で野生のクジャクを見たりしながら、ロハチャウ観光区と書かれたゲートから入園した。早朝はかなり肌寒く、オープンカーのジープでの移動はかなり寒く感じられた。

公園内に入ったところで反対側から来てゲートを出て行くジープとすれ

## 論文

違ったが、そのジープの乗客は象を見たといっていた。公園内部の道幅はようやくジープ1台が通れる程度であり、かつかなりの起伏もあった。途中で広い河原で休憩した。ガイドが河原に象の糞がころがっていることや、飛び立っていった鳥を指してその名前がキングフィッシャーであることなどを説明した。我々は結局のところ、虎も象も目撃することはできなかったが、ガイドは移動中に木の幹に刻み付けられた傷跡を指して、あれは虎がつけた傷だという説明をしていた。

9:30にジープによるサファリのエリアから退場した。そこから昨日開館時間を過ぎていて見学できなかったビジターセンターと博物館を訪れた。コルベットの歴史と概要、虎やヒョウの剥製が展示されていた。施設の案内人は杖をついていた。虎に襲われて怪我を負い、足には器具が埋め込まれているのだという。10:30に博物館を出発した。

ホリデー・キャンプに戻り、荷物を積み込んで12:00にした。途中の道すがらバンジャープ風レストランの看板を掲げる飲食店で昼食をとった。戸外に簡易ベッドのようなものが設えてあり、ベッドには幅30センチくらいの板が渡してあって、これがテーブル代わりとなるものだった。

帰りは渋滞につかまることもなくスムーズに移動することができた。15:00頃にガンジス河畔を通りかかった(デリーまで97キロとの表示があった)。妻は昨日から何度も、帰りにここによってガンジス川の聖水を汲んで帰りたいとA氏に念を押していたので、立ち寄りこととなった。河岸では沐浴をしている人の姿も見られた。河岸の外れには火葬場があり、薪が沢山積まれていた。また、河岸には屋台が出ており、献花用の花や供物、聖水を汲んでいくためのボトル容器が売られていた。

ガンジス川の聖水をボトルに汲み取り、15:20頃に出発した。デリーには18:00頃に到着した。自動車の借り上げ費用は、走行距離754キロ×9ルピーで6786ルピー、これに宿泊チャージの300ルピーが加算されて、計7086ルピーであった<sup>20</sup>。

以上が一泊二日のA氏の家族旅行である。この事例において、筆者も参加することによって観光行動への何らかの影響があった可能性は完全には否定

できないが、その影響はごくわずかな程度と考えたい<sup>21</sup>。

A氏の家族旅行は、民間企業の会社員が有給休暇を活用して実践した家族旅行のひとつの典型的な例といえるであろう。旅行中の様子も日本の会社員の家族旅行とそう違いはないように感じられた<sup>22</sup>。とはいえ、この時にはオンライン旅行会社は利用せず、近所の知り合いのタクシー会社を利用して、現地ではドライバーの紹介を頼りながらも直接交渉で宿泊やジープ・サファリの予約をするなど、口コミや現地交渉などで対処するインド的な側面もみられた。ガンジス川に繋がっていると聞いて喜んだり、せっかくガンジス河畔に来たのだから聖水を持って帰ったりという行動は、インド的（ヒンドゥー教的）な行動様式といえるであろう。また、マイカーブームが到来しているとはいえ、遠距離となると自分で運転するよりも、ドライバー付きの車両を借り上げる点も、日本の家族旅行とは異なっている。

A氏の世帯所得は単純計算すると年間48万ルピー程度であり、うえに検討したインド国立応用経済研究所の中間層の定義に当てはまるとみてよいであろう<sup>23</sup>。A氏の家族旅行からは、今日のインドの中間層が仕事と余暇を弁別し、インド的な要素を伴いながらも、余暇としてレジャー・ホリデー型の観光をごく当たり前実践し、楽しんでいることが確認できた。

## 5. おわりに

本稿ではインド中間層の観光行動に関して、政府系機関による国内観光調査を参照点としながら、独自に実施した質問紙調査に基づいて、その現状について検討した。その結果、インドにおける中間層の観光行動は、目的の点では従来の「社会的目的」「友人・親族訪問」「宗教」をまだまだ確固たるものとしつつも、「レジャー・ホリデー」目的での観光が大きく拡大していることが明らかとなった。また、訪問地については、デリーから比較的アクセスの良いヒルステーションを人気のスポットとしながらも、訪問地は全土に及んでいることも明らかとなった。

インドにおいても、有給休暇制度は比較的充実していることや、実際の家族旅行の事例から、少なくともフォーマル部門においては余暇社会が現実の

## 論文

ものとなっていることも確認できた。この点は、ショッピングモールでの買い物や耐久消費財の購入のみを持って中間層を語る議論に対して、新たな知見を提供できたと考えたい。

質問紙調査においては、南アジア圏内のみならず、すでにタイ、フィリピン、シンガポールさらにはヨーロッパ圏もが「レジャー・ホリデー」の対象地となりつつあることがうかがえた。日本では東アジアに次いで、近年では東南アジアを主な誘客市場としつつあるのが現状である。しかし、いち早く日本政府観光局がインドをビジットジャパン事業のプロモーション対象市場としたように、今後は日本へのインバウンドも含めてインドの中間層の観光行動はさらに海外各地へと広がっていくことも十分に考えられる。

最後に、観光研究という観点からすると、これまでインドの観光に関する研究はインドへのインバウンドが主要な関心となってきたが、本稿が示したように、今や国内観光や海外アウトバウンドも注目すべき事象となっていることは明らかであり、これらについても注視していく必要があることを指摘しておきたい。



## [注]

- 1) 本稿は、科学研究費補助金による共同研究「経済成長下の南アジア地域における宗教と観光に関する比較研究」（基盤研究C、研究課題番号：20510235、2008年度－2010年度、代表者：中谷哲弥）による成果の一部である。
- 2) DTSでは「観光」について旅行 (trip) と表記しているところも多いが、本稿ではこれを観光と読み替えている。
- 3) デリーはインドの連邦政府の所在地であり、「デリー国都領」として連邦直轄地のひとつを構成する。大まかにはムガル帝国時代に成立したいわゆるオールド・デリーとイギリス統治時代以降に成立したニューデリーに大きく分かれる。本稿で「デリー」という場合にはこの両方を含むものとする。
- 4) インドの有力週刊誌 India Today は毎年「ベスト・カレッジ」のランキングを發表しているが、2013年6月24日号の同特集では、ヒンドゥー・カレッジは人文分野で第9位、自然科学分野で第8位、商学分野で第7位に入っている（2013年6月24日付け India Today 誌より）。
- 5) ただし、2014年6月には、インド南部のアーンドラ・プラデーシュ州からテランガーナ地方が分離されて、29番目の州が誕生する予定となっている。
- 6) 以下、地名の表記については、アルファベット表記はせずに、『新版 南アジアを知る事典』（辛島昇ほか監修、平凡社、2012年）におけるカタカナ表記に依って記す。
- 7) 「その他」としては、年金生活者、退職者、主婦という3件の回答がみられた。
- 8) 質問紙調査では「世帯の年間所得」ないし「月収」について回答してもらった。「月収」として回答されたものについては、それを12ヶ月に換算して年間所得とした。しかし、自分の属する世帯の所得について把握していないと思われる回答者も多く、84名の対象者のうち28名が未回答であった。本文では、これら28の未回答をあらかじめ省いて、計56名分の回答のみで内訳を示している。
- 9) ウッターカンド州については58件のうち42件、ヒマーチャル・プラデーシュ州では33件のうち30件がレジャー・ホリデー目的であった。「宗教」目的は、前者で6件、後者で1件みられた。
- 10) 州の下位分類による集計の形式上、10位以内には入っていないものの、ダージリンやシロンに加えて、ネパールやブータンと接するシッキム州（訪問数6件）もコルカタ方面からの人気の高原保養地・避暑地となっている。ダージリン同様に、州都のガントクには多くの宿泊施設や飲食店がある。
- 11) 質問票で“social (marriage, etc.)”（「社会的（結婚その他）」）としている項目については、本論中では「社会的目的」と言い換えて用いている。また、「帰省」という項目を集計上では付加している。
- 12) 「ビジネス・商業」という回答は女子学生2名から計3件あった。詳細は不明だが、調査票に特記されているところによると、民間会社の手配のもとにダ

ンス・パフォーマンスをするために行ったということのようである。

- 13) 質問紙調査に協力いただいたデリー大学のダスグプト教授も「インドでは家族旅行が中心である」との見解を述べられていた(2008年10月3日)。また、日本政府観光局の『国際観光白書』(2010年版)も訪日客という脈絡であるが、インド人は「団体ツアーに参加するよりも、家族、親族などの単位で移動するケースが多いことから、個人旅行の割合が高くなっている」としている[日本政府観光局2010: 306]。
- 14) インド政府の人事・苦情処理・年金省 (Ministry of Personnel, Public Grievances and Pensions) 人事・研修局 (Department of Personnel and Training) のウェブサイトに掲載の規程「国家公務員休暇旅行特典法1998年 (Central Civil Services Leave Travel Concession Rules, 1998)」より。  
[http://persmin.gov.in/DOPT\\_ActRules\\_CCS%28LTC%29\\_Index.asp](http://persmin.gov.in/DOPT_ActRules_CCS%28LTC%29_Index.asp) (2014年4月17日最終アクセス)。
- 15) 2008年10月3日聞き取り。内容はあくまで個人の見解と経験をうかがったものである。この制度はしばしば変更もあり、省庁や外郭の団体等でかなり細かくそれぞれに規程が定められているらしく、一様の説明はできない。
- 16) ダスグプト教授より(同上)。
- 17) 2009年3月21日、A氏より。
- 18) 2009年3月21日、A氏自宅でのインタビュー及び観察より。
- 19) コルベット国立公園公式サイト。<http://www.corbettnationalpark.in/index.html> (2014年4月20日最終アクセス)
- 20) この時の旅行費用に関しては、自動車の借り上げ費用は筆者がすべて負担したものの、その他の宿泊費用や現地での食費については筆者分も含めてすべてA氏が負担した。
- 21) 筆者とA氏家族とは2001年からの交友がありデリー訪問の際には必ず一度はA氏宅でも宿泊させていただくような関係を保ってきた。また、A氏と筆者は生年も同じで子どもの年齢も同様であり、家族ぐるみの交流の機会もあったことから、いわゆる調査におけるラポールは高度に保たれていた。また、同行しながらの観察においても、筆者がいるので行き先や予定を変更したり、食事や宿泊を変更したりという事態が生じたと感じることはなかった。
- 22) 極めて個人的な感想であるが、旅程におけるA氏家族の様子はまるで我が家のことを見ているようであり、インドの中間層の観光行動といっても、取り立てて論じるべきポイントを探しあぐねるほどであった。さらに仕事と休みを弁別し、有給休暇の日数を正確に把握して休みを取ろうという姿勢は、筆者にはとても真似のできない芸当であると逆に感心したほどであった。
- 23) ちなみに、A氏自身も自らを中間層(ミドルクラス)として意識していると述べていた。A氏は中間層をさらにlower, middle, upperの3つのレベルに分けて考えており、lowerであればオートバイ、middleでは自家用車、

upperではこれらに加えて海外旅行も可能であると整理していた。この時には、A氏は自身のことを「lowerよりも少しの上の中間層」とであると自己分析していた（2009年3月21日、A氏より）。しかし、A氏は2008年には小型車ながら自家用車を購入しているの、自身による整理に従えばmiddleの中間層となろう。

#### 参考文献

- 石崎雄久 2011「訪日インド人旅行者の観光動向とプロモーション活動」『日本観光研究学会第26回全国大会論文集』、pp. 169-72.
- 中谷純江 2009「新しいコミュニティ祭礼の出現－ラージャスターン農村におけるラームデーヴ信仰と巡礼」『南アジア研究』21、pp. 60-86.
- Nakatani, Tetsuya 2003, "A Sacred Place or Tourist Spot? Rediscovery of Sri Caitanya's Birth Place and the Development of Mayapur as a Mass Attraction Site", *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies*, 15, pp.113-141.
- 中谷哲弥 2010「新興国における中間層の拡大と観光－インドにおける国内観光の動向を中心として」『奈良県立大学研究季報』20（3）（地域創造学研究 V）、pp. 127-155.
- 中村まり 2008「インド消費者像の変化－所得階層別分析から」『アジ研ワールド・トレンド』156、pp. 30-33.
- 日本政府観光局（JNTO）2010『国際観光白書』（2010年版）、（財）国際観光サービスセンター。
- National Council of Applied Economic Research, 2002-3, *Domestic Tourism Survey*, New Delhi: National Council of Applied Economic Research.

< 調査票 > Questionnaire on Travel Experience

Please answer the following questions about your travel experience of last five times.

Caution: "Here, travel includes any act like visiting friends and relatives, pilgrimage, study tour, etc."  
"Travel includes both international and domestic travels."

Privacy Policy: All answers will be statistically processed, so that any particular answer will not be disclosed as a rule. Data will be used only for academic purpose.

Contact: Prof. Tetsuya Nakatani, Nara Prefectural University, Japan. E-mail: nakatani@narapu.ac.jp

Please answer about you: (☑ or fill in the blanks )

1. Sex  male  female
2. Age ..... years old
3. Religion  Muslim  Hindu  Buddhist  Christian  others (in detail ..... )
4. Home Address: ..... Thana ..... District ..... State
5. Occupation of your household head (father/guardian)  
 agriculture  wage earner (agriculture)  salaried (govt.)  salaried (private)  business/trade  
 professional/self-employed  wage earner (non-agriculture)  others (in detail ..... )
6. Annual Household Income (including your parents) ..... Rs.

Please answer about your travel experiences: ( or fill in the blanks )

1. latest travel experience

- 1) Name of Destination .....
- 2) Major attractions .....
- 3) When you traveled? In the year of .....
- 4) What was the purpose of travel?  
 leisure/holiday  religious  visiting relatives/friends  study  social (marriage, etc. )  
 business/trade  
 others (in detail ..... )
- 5) Who accompanied with you?  
 father  mother  brother/sister  grandfather/grandmother  relatives  friends  
 others (in detail ..... )
- 6) How many days you spent there?  
 one day (day trip)  2-3days  4-7days  more than 7 days  others (in detail ..... days)
- 7) How did you get there?  
 by rail  by bus  by car  by air  on foot  others (in detail ..... )
- 8) Who arranged your travel?  
 travel agents  by yourself  family member  friends  relatives  neighbors  school  
 others (in detail ..... )
- 9) What kind of accommodations you stayed over?  
 hotels  guest house  non-commercial inn (Dharmasala, etc.)  relatives' home  friends' home  
 others (in detail ..... )